
虚像の鏡

綾さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚像の鏡

【Nコード】

N7034M

【作者名】

綾さくら

【あらすじ】

ただほんのつかの間の日常をわすれさせてくれる、一抹の刺激が欲しかった。夫という人がありながら、この頃とくに、時折むねをよぎるあの人や、ふとした拍子に出会ってしまう素敵な異性……。主婦だから、と新しい世界に飛び込む勇気が出ない。その反面わたしは一人の女性なんだから。複雑な内面をつづっていく、ごくごく平凡な主婦のものがたり。

prologueにかえて

主要登場人物／ 篠山みきこ（わたし、語り手でもあり．．時にはぼやくことも．．独り言が多いキャラクター）どこにでもいる主婦。結婚してずっと専業で家事に没頭する毎日。だが時には夫とだけ顔を合わす生活に辟易する事もある。そんな日常が少しでも変われば、と、刺激を求めはするが、結局、臆病が顔をのぞかし、まじめだけがとりえな女性。

篠山サンジ（わたしの夫．．ひとまわり年上の夫。出会いはナンパに近かった。きをつかうことのない分、結婚生活にもはやときめきとか求める間柄じゃなくなってる。このままでもいいの？いつも同じ疑問ばかりがぐるぐる生じる。ある意味、そういう所に惹かれて？おおらかな夫だからこそ、年下なみきこの未熟な部分をカバーしてくれている。なんだかんだでこの人なしでは生きてこれてない、そう、思う。お互いに根はまじめであるせいか、そこが唯一の共通点？

引島カレン（ご近所に住む、みきこが嫁いできてから何かときにかけてきてくれる、年上のベテラン奥さん。なんでも素早くテキパキと動く人で、こういう人こそ主婦の鑑と崇めて間違いはないのだろう。けれどその分、みきこには時折、わが娘でもあるような？適切すぎるアドバイスなんかも、くれるので、きのぬけない人物

木納タカノブ（大分まえにだが、友達であるような、恋人ぽくもある。そういう中途半端な関係が築きあがっていた。この人とは、ネットを通じ、何かフイーリングが合ったのか。実際会うところまで

いった。ある種、希少な関係といってもいいだろう。．．夫ととの出会いは、この人と縁を切って、2年くらいのおち。同い年である為、とにかく話がスムーズ。見た目も若者らしく、どっか刺激的な人物。連絡はまったくとっておらず、それでも思い出せば懐かしくなれる、未だあまい気持ちをくれる人

諏野グン太（みきこお気に入り、SHOPでさいきん入った若い店員。本が読めるカフェ、という好きなものが二つ同時に楽しめる、というコンセプトに惹かれて、こっちへ越してきて、一番なじみの深い場所となっている。みきこにとっては、大切な憩いの場。夫とも時折、コーヒーを楽しみにゆく。だが、夫といると、夫のせかせかしたペースに邪魔されるから、ちょっとつままない。

年齢不詳だが、とにかく笑顔をかかさない、子犬のような癒し系。永遠に年をとらなさそうな外見

元寄浩平（夫の同僚。夫から見ればライバルでもあり、きのおけない会社仲間。帰ってくるいつも愚痴ばかりいって、いいんだか悪いんだかよくわからない。複雑な間柄らしい。でも、話をきいている分じゃあ、大分夫のサポートにもまわってくれているらしいので、夫より大分要領よく、立ち回れるヤツだ。そんな印象。夫の話す内容からはざっとこんな感じに。でも、よく耳にする人物

純太（みきこの弟。5つ下

両親

親戚

その他

もっともっとう過去は雄弁く

わたしは海に来ていた。

こんなサラサラの砂なんていつ、崩れるかも、わからないのに。

どうして、わたしを支えられているんだろう。運転席で彼は、いろいろ途中、窓の外で摩り替わる景色を、具体的に説明してくれたりもした。だけれど、わたしの意識はもはやそこに集中していることすらできなくて、下手すると、始終うつむきそうになりそうなほど。

わたしは少し病んでいた。

こんなわたしの心境を察知した彼が、いちはやく連れ出してくれたのかも、しれないのに。

ごめんね・・・なんか・・・。せっかく久しぶりの、再会だというのに。暗く、してしまつて。

「もしかして酔ってる？」

俺、運転のうで、落ちた？」

「えっ　???」

急に、景色じゃない話の内容に虚をつかれた。

「な

なにになになになにつ???運転が・・・?」

「いや。

だからあ、

もう、いいよっ」
ぷい。

少年の様にかかるくがらした唇は、そっぽを向きかける。

ああ。まだそんな、ほほえましくなれる、顔みせてくれるんだね。
わかっているのかな。わたし、これでも主婦になって、大分経つんだよ。その間、いまみたいに、こんな感情。

夫に対して、持ったことがなかった気がする。

て、いうか忘れ去っちゃってた。

「もうすぐ

着くよ

江ノ島」

「わ あ。。。」

ごく普通の住宅街みたいな、少しごちゃついた道路を走っていた車の目の前が、映画のワンシーンみたい。一気にひらけた。いやだ。デートしているみたい!!!!

きゃああああ!!!!

こころははしやぐ。

思い切り、少女の様に、叫びだしたい。だけど、それを受け止める人とは、来ていない。

そのことが、わたしの動向を、一気に制限してた。

「おとなしいね ? 今日」

「え? そ.. そうかな?」

「.. なんですか、結婚して、しばらくすると、みんな、どっか落ち着いちゃうのかなあ? つまんなくないの。そんなんで。

自分を、妻っていう板にしぼりつけて」

「えっ？は？

なにを、いつてるの！結婚してないくせに、えらそうな口、きかないで」

つい口調が、強くなる。・・・いつもしている痴話げんかだ、これじゃ。

いつしか、彼の横顔は、年若い、とっても遠い日の少年の様。よかったころの古い映画みたい。運転席で焼き付いて見えた。

あたしが・・・いけない。

ごめん。反省する。

「ま、いいんだけど

ただ一緒に来たかったただだからあ

「え？」

、ただ一緒に来たかったただだからあ、

窓の上ゆれてるミラーには、むかし二人で入ったサーフショップ。そこで買った、どっかよその国からのお守りが、名残惜しそうに、ゆれている。

「さ、着いたよ

いこっ　！！」

今日の目的地へ着いた。

無事・・・こられた・・・。それがどうしようもない奇跡におもえてくる。いってしまえば、ナンデイマあたしここに来ているんだ・

今朝、いつものようにわが夫を送り出した、その後で・・・。いつもはしない、明るめのグロスを二度塗りした上で、あんまり華美にならないよう。ご近所の目をいつでもきにする、わたしは。いつものどってことない、服で家を出た。

夫には昨夜、帰宅した時点で軽く告げておいたけれど。

「・・・あした、むかしの同級生だった、ノリ子と会ってくるかもしれない」

「ノリ子ちゃんて、あの、いつもよく、はがきくれる人か？」

「うん・・・と、その子は違うんだけど。」

でも、高校のとき同じ部活で。仲がよかったんだ。
ひさしぶりに、会いたいね、ってメールで話がはずんだんだ」

すごい滑らかに。自分でも冴えてる！と褒めたいくらいな、うそが出た。

それを証拠に、いつもと至って変わらない、わたしの顔には少しの動揺もあらわれておらず、夫は、わたしのその話を、ただの世間話同様。かるく流した。

「そうか。」

きをつけて、いってきなさい。あんまり遅くならないで

あ、遅くなるようだったら、メールくれればいいから

こっちは適当に、飯買ってきてもいいし」

「あ。」

ううん！

そんなには、遅くならないよ！

ひさびさだから・・・

緊張して、話がつづかなかったりするかも」

とかなんとかいっちゃって。出かける前に、ひとつでも罪悪感に繋がるようなもの、除いておきたくて、計算してきた。

朝のあかるい日差し。その中を、ひとりでに早足になりながら、かばんだけを少しよそ行きの、丈夫なヤツに変えただけの、ぜんぜんデートっぽくない、簡素ないでたち。

で、わたしは、通勤戦争まださめやらぬ、街中の駅にたち、彼の車を探した。

実際、来て、そうやって立っていると。昔の友達と会うことと、昔の彼と会うことと、そう違わない、と思えてきて、何とか平常心を保とう、と、浮き足立つ心はかんじていなかった。

だけど、分かれてから2年以上たつ、今でさえ、変わってなかった彼の車。当時のまんま、どれひとつとって、変わることはない、彼の横顔に再会して、心に焦りにも似た、不可解な影がさし始めた。その影は、いつしか、不穏な車内の空気へと交わり、すべてがいやおうなく彼に伝わっていったのだった。

「水着、

着てきた？」

はっ。

「え？」

きがつけば、彼はわたしより大分先の、より、波打ち際へ近い場所。そこからこっちを振り向いた。

時折巻き上がる、強い潮風まじりの、痛い砂。

目を細くあけながら、うまく距離を保ち、歩くわたしたちの前方に、若いカップルたち。．．．なんて無邪気なんだろう。あの子達も。いつかは、結婚して．．．

「な。」

さっきっからひとの話、きいてるっっ？」

「うん。」

あ。

ごめんなさい

なんでしたっけ」

「なんでしたっけ、

って・・・」

「あ。

ごめんなさ・・・

いえ、あのっ・・・

つい・・・

口調が・・・いつもの癖でっっ」

「ふっ！～！

お・ば・さん!!」

「えっ！

な、なによオ！なんなのよオ！

あんたのほうこそ～！いきなりこんなっ。

だだっぴろい海に、つれてきてえ！

それこそ、こんなおばさんになったわたしを誘惑しにきたのオ？」

口をついて出るのは・・・ほんとうに、おばさんぽくなってしまったかの様。いじわるめいた台詞。

「いやいや

水着、着てきたか、　だよっ！

さっきからきいてんジャン」

「も。

もくってるわけがないでしょおおお！」

遠めに見える、カップルたち。

きれいに水着をつけた、はりのある肌色のすはだたち。

砂の色とやら違和感なく、歩くことができるのは、彼女たちみたいな、純粋な人たちだけだよ。もはや。

わたしなんかが・・・

水着だって。

去年。おとし買ったヤツがたった1着、あるのみだし。って。だから、こんな海、来る、なんていってなかったから、持ってこなかっただけもん。

「じゃ。

俺、脱ぐ」

は？え？

「な、

なによいきなりうわあああああ わあああ！！

きやあ

きやああ！やめてっ！みつともない！男の恥！いつたいいくつだとおもってんのよお！」

「あ？」

見ると、すぐそこ。彼は、はいているショートパンツに手をかけて、派手柄のアンダーウェアが軽く見える位置までおろしはじめている。

「ぎゃあああ！」

「いやああ！！！！」

$$\neg \wedge ?$$

これ・・・海パンなんだけどさ」

「え」

そ、

それでも。。。。

なんかっ！

い、い、いっやあああああ！！！！！！！！！！

!!!

わたしは、耳の奥までまっかになりながら、両手で顔を覆う。軽く開いた指の隙間からも、この、太陽の光線は、いつまでも目を焼いていた。それでも、海辺のおひさまはなんだかいつまでも、あたっていたくなっちゃう、やさしささえ。感じられるのが、不思議だった。

・・・ふしぎだった。
ふしぎ・・・

ああ・・・ふしぎ・・・ふしぎ・・・

ンムー。

「・・・いつ

おいっ!!

おい!

みきこつてば！

起きろ！起きてくれ！

俺もう、いかなきゃ！」

「あひーいゃん

だめェん。らめだめっそんなん

見せたらいやん！」

「みきこ~~~~~！！！！」

ぐらぐらぐら！！！！

大きく体がゆさぶられて。緊急事態なのを察知した。

からだは、あたまよりも先に、

がばっ！！！

飛び起きている。

「は？

はっ。
あれ。

うみ。はまべ。ぴたごらす」

「・・・ いい夢みてたみたいだな」

あたりを確認する。

そこは、いつもと変わらない。少ししけたたにおいのする、寝室。
ベットの上。

目の前に、作業着を通勤着と決めて、毎朝さっそうと着こんでゆく。夫の姿がみてとれた。

ゆうべ遅く帰ったから、飲んだお酒が顔にでたまんま。
むくんだ目の奥、ちよつとぎらつかせていた。

「は
・
・
・

って・今。なん
じっ? ? ? ?
」

枕元でいつもは鳴るはずの、目覚ましが、きこえなかった!?

「おまえが

あんまり心地よさそうにぐっすりだ もんで

疲れがたまってるんだろーと思ってさ

とめておいたよ」

「ちよ！」

とめた、って ちょちょ!!!」

「ちょちょちょ、

じゃ。ない

俺、もういかなきゃ。んじやな。

見送りは、ここからで いいよ!

んじやな

いってきます」

・・・ 相変わらずの、おっとりマイペースな夫が、やはり、いつもの様。少々あせりながらも。いつもの様に、出掛けてゆく。

そんな一日が、きょうも開けた。

ふ、て

夢が尾をひいたまんま、まだちょっと覚めやらぬ頭で、カーテンを引いた、床の上。なんだか懐かしい、まぶしさを、受けて・・・砂のようなものが、光っているわ。

「！」

うわ！

なんだあれ。いつのまに溜まった誇りが、うずたかく積もっているう！！！！

海辺の風景にや程遠い。我が寝室に差し込む光。

それは、永遠にかわらない安心とぬくもりを約束付けてくれているものであり、つまりは、永遠にかわらない日常の証でも、あるのだけど・・・

真実の鏡

「あなた　いつてらっしゃい」

「おかえりなさい　あなた」

そういつて、毎朝毎夕、夫を玄関に出て送ったり、迎えたり。

そんなわたしをいつも凝視している・・・

そう、それは鏡だ。

わたしは鏡、という存在にそれ程親しみを込められるほど、美貌の持ち主じゃ、ないし。だいたいそんなのはモデルさんか、あるいはどっかミスコンで上位入賞したとか。どっか自分の容姿に自信がないことには、とてもとても、この大きな一枚ガラス。の前に立ち、自分の体を、すみからすみまで眺め回す。そんな芸当、できた試しなんて、ない。

だから、実をいうと、試着室がやたら多いブティック・・・いや。ふつうのスーパーや何かの片隅にでも、今はちゃんとカーテンをつけた試着室がしつらえてあったり。な、場所ってぎりぎりで店員さんからの越えかけをかわしたり、するのでせせこましいから。この頃あまり行っていなかった。

だいたい、ワンサイズ大きかろうが、そういうものはちゃんと、適当に着こなす術を心得ている。そこがわたしという、まじめ主婦の誇れる部分だろうか。要するに・・・ファッションなんてどうだって。

二の、次。

わたしは、美しく、鏡をはだみはなさずして、いつも着飾っていても、いいのだ。

どんなスマートな恰好いいファッションでいたとしたって、肩が凝ってしまい。すぐ脱ぎたくなるのがオチよ。

どういう経路で、こういったややひねくれ気味の回答がうまれでるのかはいざしらず。

こうやって、毎日わたしは、玄関できびすを返し、わたし自身をいつわることなく映し出す、鏡、と対峙してはいつもなんだか、どこを見てよいものか、視線をさまよわせるのだった。

それにしても、なんで鏡なんてこんなところに掛けてあるんだっけ。

そうだ・・・飾りにって、ここへわたしが嫁いだ当初は、ほんとう、ここって殺風景だった。わたしでさえ何かをごちゃごちゃ盛り立てる様なインテリアは嫌いだけど、あまりに寂しすぎて。

後から住まわしてもらった分際で、随分えらそうなケチをつけたもんだ。

「ここは寂しすぎる！」

こんなんじゃないあたし住めない！なんとか変えて！！！」

あのいつもの困ったような、笑いたいような不可思議な表情で、夫が連れて行ってくれた。大きな大きな家具屋さん。

そこは、今でも時折おとずれたりする、わたしたちにとっては思い出ふかい場所のひとつだったりもする。んだけど、そこで、あの時なにげなく夫が言ったのは

「そういえば家には、姿見みたいなの、なかったなあ

俺の実家じゃ、おふくろが着物を着せるの上手で。たまに近所の
子供にも、

ゆかた着させて、よろこばれてたっけ．．」

「あら、ごめんね

あなたの御母さんとは程遠い人材で」

「な

なにも、そんな話していないじゃないかあゝ今」

どうせ着物の着付けなんてこの先、学ぶ予定もないし．．．で、
通り過ぎるわたしを、呼び止めて夫はこう、つけくわえた。

「なあ？

俺、腹でてないか？

そういえば、結婚当初にくらべ．．体重が5，6Kg増えた気が
する

これ、体型が映るから、買って毎朝みれば健康維持につながるか

もしれん」

そんなもつともすぎる夫の言い分に妙に納得して、わたしはわたしで。

「そうだね、なんかあの玄関ってさびしいもん。白い壁だけだから、つと延びてて。

塗り壁みたい

夜中とかあの前に立ちたくないもん」

とか、なんとか言って。結局ふたりの意見が一致した。そこは珍しかったといわざるを得ない。二人ともなんだかんだ自分の言い分をききいれてほしい、子供なタチなんだから。

でも、あの頃ってまだ、今ほど退屈もしていなかったから。そうそう。朝、夫を送り出した後、鏡に向かい投げキッスとかしてたんだよ。今では笑える。誰かに覗き見されていたら、ぶきみなことこの上なかっただろう。

ある日のこと。

田舎から荷物が、とどいた。夫の親戚からだど、いう。いつも決まった時期になると自家製だ、といって大量に小ぶりのみ

かんを送ってくる。小夏、っていうらしい。わたしは、果物系統、自分からあまり買ったためしがなくて、それはただ単にめんどくさい、というばかりではなく、それ程、果物の重要さをまだ知らないがため、でして。

夫は、自分の生まれた故郷から送られてくる美味に舌鼓。いつもだいたいは夫が、もういい、ていって飽きるまでたいらげた。

後の残りは、会社の同僚へ配ってしまったり、それでも残ったあとの数個を、ソーダ割りとかにする。

こんなサイクルもとうにできあがっていた。

夫の田舎からはあと何回おくられてくるだろうか？想像したくもないのだけど。うー。．．．むげに断るわけにもいかないし。かといって、多分。いらない、といってもききいれなさそう、あの、親戚連中ご一行さまたちなのだ。

洗濯ものを干し終え、ちよつと休憩モードでいた。そんな生ぬるい気分の時に、チャイムの音がゆっくり響きわたった。

がちゃ。

ドアをあける。

なんとなく、では、あるものの。まったく赤の他人、といってしまうにはよそよそしすぎ。もう大分かおなじみでもある、宅配のおにいさんだった。

「はい、はい♪

印鑑ですね」

宅配のおにいさんが来てくれる日は、どことなく気分がよくなる。

なんだろうか。

ひとりでに、気持ち弾ませながら印鑑をとっていると、事務的に押し受けた。

「あ、重たいですよ？きをつけてくださいね」

「あ、はい。わかりました どうもありがとうございます」

自然と笑みがこぼれてく。

いいよね、女性あつかいされてる、って思える、こんな瞬間はやら新鮮。

「じゃ、

どうもです」

「どうもお

なにげなく挨拶を交わし終えたわたしは、ドアをあけたまんまにし、
小ぶりのダンボールを上がりかまちに乗せた。
ふうっ。。。。

て、顔をあげたその瞬間。

背中越しに、一作業を終え、後ろの荷台で整理でもしているのか。
さきほどのおにいさんが、鏡に映ってみえたのだ。

あ。

あ。

あ。あ。あ。

だっ。。

ダンディー――――
――――
――――！？

あれえ？
なんでえ？

あれって、いつものおにいさん、よねえ。一瞬べつじんと見まがうほどの、生真面目な横顔だったのを、見逃しはしなかった。鏡越し。

振り返った。けど。もう、いなかった。

おにいさんは運転席に乗り込んだ後、ブロロロおーーって音たてて、いつてしまいました。

どっくん。
どっくん。

どっくん。

どっくん。。。。

何か、ほんの数秒間だったけれど、いけないものをみてしまったかの、様に。

あたしは、罪を犯した、イヴみたいに軽く呆けて立っていた。

あ。いかん。蚊が飛び込んでくるから、ドアーしめないとな。

んだった・・・けれど・・・

案外。みなおした。
この、鏡って。

っへえー！・・・ 意外と隠れた威力を発揮してくれるんじゃない。

鏡から見えるのって死角になってるぼくてさ、人はまさか自分が見られていようとは思わないのでしょう。だからこそ、あの生真面目な、いつもは見せることのない、自然体の横顔を、わたしは鏡の中に、みつけてしまった。

軽く、こころをわしづかみにされたまんま。
少女にかえった気分。

わたしは、夕飯の買い物へでかけよう。思い立った。
普段どおりの、さえない地味な服に、小さなバッグを持った。財布に、ハンカチ・・・携帯電話と。家の鍵。いれわすれは、ないよね。
玄関前に立つと、鏡の存在が、今朝より少し近い。

んっ？て。あれ？

あたし、顔のこんなところにほくろできてた？ 新たな発見までして
しまう。

遠目から見ると、地味だし。だあれも振り向いたりなんか、しない。
この容姿を。でも、こうやって、まじまじと、近くで、見れば。ん
まあ・・・それ・・・なりに。映ったりなんか、しないかなあ？

久しくやっていなかった、上目遣いおおげさまばたき攻撃。ぶしゅ
ぶしゅぶしゅ！

とかつて。おいおい。誰にみせるつもり・・・

「そんじゃあ。

鏡さん。

いってきまっす！」

鏡への愛着を今ほんの少しだけ覚えた気が、する。そして今日、見
えた、こころの奥くすぐる、ときめきのあの、シーンのことは、だ
あれにも、はなさない。おしえなくいい・・・んだ。

鏡とわたしだけの、秘密。だからね。

ドアを出ると、オレンジに傾いた夕日がやさしいまなざしで町をつつみこみその、うすいブランケットのような輝きが、わたしの足元までじわじわと、のびてきている最中だった。

雨の水鏡

今朝の報道番組は入ったばかりの恋愛報道でおおにぎわいだった。

あまりこういった情報を仕入れても、仕方のないこと、とおもっているわたしにとってはどうでもいい内容なものばかり。では、あったけど、今朝のその報道に関してはちょっとおもしろいな、と思える部分があった。

今話題の、テレビCMや何かにひっぱりだこ、でもある。タレント活動もめまぐるしい。メイクアップアーティスト。その、お相手が10歳としたアイドルタレントだというから、人の恋愛観には個人差が相当ある様に思える。その、彼のまだらに染め抜いた茶銀の髪や、いけめんなルックスから想像するに裏じゃかなりモテていそうだ。しかし、彼が大人から若い子まで、老若男女問わず人気を博しているのは、そのキャラクターにある、とわたしは思い込んでいるからだ。

「○○さん！」

「○○さん！……！今回の報道、に関してはどのように受け止められますか？」

「○○さん！○○さん！……！あ……！……！……！……！……！」

「

ほかの記者たちに押されて、女性記者の一人がパニックった状態が、TVの冒頭で映されて、今も時折そのインパクト大！の映像が、繰り返し流れている。

相変わらず涼しげな目元を軽くゆるめて、台風の目の様なありさまで去ってゆく、彼がはじめて男、としての本能をかぎつけられた時。世間は驚きと、いままで思い描いてきたイメージ。彼とのギャップが一致しなかったんじゃないだろうか、と思う。

そんな、報道記者たちに揉まれ続ける彼の口からぼろり、こぼれ出た一言。

しつこく迫りくる記者たちを振り切ったのち、少し威圧を込めた迫力のまなざしに切り替わる。誰もが息を呑んでまった次の瞬間、

「あたしも、人の子ですから」

一瞬、あたりを静寂が波打った。しかし。ここぞ、とばかり、もつと何か面白いコメントを引き出そうと思うのか、またたくまに記者たちはそれぞれ、くちぐちにあれやこれや、質問を始める。大量のマイクがつきつけられる前に、またも彼は、ヒールをもともせず、こなれた仕草で歩いていってしまう。

長身なその体から繰り広げられる数々のパフォーマンス。それはモデル顔まけのウォーキングに始まり、CMでは俗にいうモデル立ち（？）というのを堂々と披露し、ほとんど女装に近いでたちなのがほんとうに周りからうけているのだった。

女のあたしをこんなにも肩身せまくする、んだから、今時ライバルと呼べるのが同姓ばかりじゃなくなってきた、という話だ。

「あたしも、人の子ですから」

かあ・・・

ふう・・・

ぼんやりと、なあにも起こらない日常の中。こうしてお茶をすすりながら見つめる画面の向こう。ただならぬ雰囲気の中、彼がその決め台詞をはくシーンを何度も見ているうちに、ドラマでもみている気分になっていき、ついには彼の魅力にひきこまれてしまうのだった。

だめだよ。どっちにしろ。

ああいう人たちはさ、魅力のもちぬだもん。たとえおねえ言葉がウリだったとして、顔はかっこいいし。お金もいっぱいもっているんだろうし、さ。もともともっている価値観というものが、違すぎるのよ。所詮、こちらは一般庶民なのよ。

朝食の重たさも手伝って、しだいにまぶたが下へ下へひきよせられ

る。

うゝん。。。

この時間がいちばんのゝんびり。主婦にとっちゃ一番リラックスできるきままな時間だよお

ああ・・・

TVはつけっぱなしのまま、軽く眠りにおちていたのだろう。

霧の様な景色の向こうで電車のベルがなっている。いかなきゃ。はやく！走らないと、乗り遅れる。乗り遅れるよォ。はしれ、はしるんだあ。みきこおゝ！！！！

渾身のダッシュ！

こぶしをにぎりしめて、かけだそう、とした。その、シュンカン！

がん！

何かがぶつかり飛び散る火花に、わたしは一瞬きを失いかけた。

「うつ。。。。」

「つつたあああああ???」
ててててエ。。。。

おでこ打ったあ。。。。

いたあ!!!

どうやらわたしは眠りこけて、ちやぶ台の下に入り込んでしまっていたらしい。

それにしても、久々、星がめのまえをちかちかゆすぶる。それぐらいに、痛い。起き抜けにこれはないでしょう。もお。おたんこぶができたかどうかしてくれるのよお。

なんだかんだ、みえない何かのせいにながら、それでもなんとか、ゆっくり這い出せた。

P u . R u u u R u u u P u . R u u R u u u P u .
R u u u R u u . . .

延々と。なっている。どっか遠くできこえてた電車のベル。
そう、思っていたのは、電話だったんだ！

夢の終わりと、現実がごっちゃになって．．はいはい。はい．．．
誰だろお。こんな時間に？変な電話は即効切るからねっ。

かるいめまいにみまわれている頭で、受話器をとる。

なにかざわつく背景の前に、その、人物は立っていると、思われ、
とにかく町の喧騒ばい雰囲気、しばし現実から遠ざかりそうにな
った。

「はい．．．どちらさまでしょう」

「．．．ろ？」

わかってるんだろう？さちこ。俺だって

なあ？わかっていて、さっきから、何度も電話しているのに。で
なかったんだろ？俺のこと、もう

愛してないのかさちこ」

「は？」

え？どちらに．．．」

「しらばっくれるな

しってるんだぞ

こないだセミナーのあと信二といちゃついていた、ってももこが教
えてくれた

そのあと、飲み会に顔出して、そのままアイツと出て行ったそうじゃないか！

「どう、説明つけてくれるんだよ！」

うう。おでこから鈍痛が響き始めてくる。そこに、受話器の向こうからきんきん叫ぶ声。しかしすぐには受話器を置くことができぬ、何かただならぬ引力が、その男から放出されていたのだろうか。わたしはおでこの痛みを、なんとか鎮めながら、だまって突っ立っていた。

「おい。さちこ」

おい！さちこ、さちこ……さちこ

ほんとうに愛してるのはお前だけなんだ！ わかっているだろ！
ほら、ここで今。こんな街中に立って、愛してる！ って大声でだ
っていえるよ！

さちこ!!!

[illegible]

町中の騒音をBGMにした、彼からの叫びは、十分すぎるくらいわたしの耳つきぬけて、ここに届いた。でもまったくもって相手がちがっちゃっている。だからこそ、前置きなしな、彼からのこの電話。ああ……出てすぐに切ってしまえばよかったのに。

「お宅、かける相手まちがっていますよ？」

うしろがみひかれる前に、すばやい低さで男に告げると、この手を

おろした。

男は、町中で叫んだ事が無碍に成ったと、くやんでいるでしょうか。それとも。また、その、さちこさん、というお相手やらが、ひとしばいうった、とかって。そうしてまた、間違い電話やらかすの？どっちにしろ。男ってよく、飽きもせず。愛を語るもんだわ・

ハッ！！！！

こ、これってどこか悲しい間違い？さげすんだ考え？

さびしい〜いアラサー主婦の現実は、そんなもんじゃないですよだ。・・・って、たかが間違い電話にあつくなくてどうするの。わたし。

つまらなくなつて、結局わたしはお財布とちよつとした身だしなみ品を入れた、バッグつかんで、でかけることにした。

何かお夕飯の献立になるものがあれば。・・・近くのスーパーまで足を向けよう。

午前中は日差しが暑かった、と思えていたのだけれど、どうも天気はおもわしくない方へ向かっている様だ。げんにわたしのこめかみにポツ。何かつめたい雫があたったみたいと思う。

まあ、近い場所だから、傘がなくても、走ればいいでしょう。しかしここ数年走ったことなんてないからこむらがえりを起こしてしまうかな。

とか、なんとか、ひとりぼやきつつ勝手にスーパーに着いていた。簡単に作れるお惣菜のものなんかを1つ2つカゴに入れて、お魚でみたされたケースをのぞいている。すると、店内にいる誰かから悲鳴があがった。

「きゃあ！

どおしよー！！降らないと思って、洗濯物だしたまよー！！」

みると、店の外が昼間とは思えない暗さになっていた。洗濯物の心配は無用だったけど、さすがに少々怖くもなった。

だって雷おちたらいやだもん！うわあ！！！！

あわててわたしも、先のお客にせかされる様にして、レジへと向かい素早く支払いを済ませた。

そうやって天気にながされるまま、スーパーの袋かたてに店を出たときには、東の空から西に向かってあばれるように。雲がぐんぐん流れていくのが見えた。

うわあ。これは、一雨ならぬ、二雨も三雨も、くるわよお。くる、くる。

ささ、っと先を急ぎましょう。

女の足ではとうてい、逃げ切れぬ。

だけれど走らないよりは、マシ。

最終的に、小走りになりながら、靴がぬげないよう、気を遣い、さげたビニール袋はふくらはぎにぽしぽしあたたつた。

なんとかもつてくれ。

なんとか、こうにか、降らないでいてくれ。。。雨にはぬれたくないよぉ。。。。

走って、両脇を家々に挟まれた、小さな坂をあがってゆく。その先
に続くうつそうとした竹やぶを尻目に。ああ．．．雨で土が流れ
てきちゃう。だから、その前に、わたしを家までたどりつかせて
ください。神様、仏様！

もう、すでに雨粒はしっかりと確信をもって降りてきていた。しだいしだいに、乾いた地面の色がさまがわりしてゆく。やねやねを叩くドラムみたいなリズムがはやくなる。

はしって、る。けど。

はしっている。んだ、けど！わあ！！！！さすがに！自然の驚異！まったくかなわないわあ！

[illegible]

一気に饒舌な雨が、わたしの肩やスカートまでをぬらした。なんとかビニール袋の中身だけでも、と、口をかたく絞ってみたけれど。そんなこと何の役にもたたないくらい。とにかく雨は、先を急げないほどに、目や鼻、口をふさぐ。

いつも通っている道だけれど、まったく使ったことのないバス停が、ぼつんて。口をあけていた。

そうだ。なんとか。あそこまで！余力をつかって駆け抜けた。

きやああああああ

ああああああああ

ああああああああ

ああああああああ

ああああああああ。

ばちゃばちゃばちゃ。低いヒールで水玉をはねちらかし、ほうほうのていで、かけこんでゆく。

すると、そこにはすでに先客が、いて、おなじ状況におちいつてしまったお互いの心境をなめあう様な一種異様ななまぬるい連鎖ができてきていた。

一人は初老の、腰がまがったおばあさん。そしてもう、一人の子は、ごくごく若い。通学帽のあたらしさ、からいって新入生、だろうか。ういういしい。そのこめかみにはわたしに対する、軽い緊張から、だろうか。細くて薄い筋が浮き立っている。

小さく息をはいて、わたしは。会釈ともあいさつともとれぬ角度で、かるく目をふせたまま、二人のいる前をとおって、いちばん端へ入

れさせて、もらった。

ふう・・・

それにしたって。なんだった。こんなぁ・・・ゲリラ豪雨ってやつかしら。これが。

バッグの中からハンカチを取り出すと、軽く湿ったそれで、頭をふいた。すぐに乾いた部分は消えて、自身同様、ハンカチもぐしょ濡れになってしまった。

「よかったらコレ

つかってください・・・わたしはもうすぐ迎えがきますんで」

地の底からわいたのか。しわがれた、それでいてあたたかい声の、老婆。その手に、小さくたたまれたやわらかいハンカチがのせられていて、わたしはとっさに、首を左右にふっていた。

「あ！

い、いい！

いいですっ！これで、十分です！おばあさん、遣ってください」

「いいんですよ

遠慮なさらずに
こうしてあったのも何かのご縁かしら」

でも。

と、躊躇している、そこへ遠くの方から確かな足音がちかづいてくるのがきこえて。わたしたちのいるバス停の前でとまった。

「やっぱりここだったか！

急にきたもんで、ばあちゃん、どこで雨宿りしてるかなあ」と。
近所の茶のみ友達にも

きいて回ったし。

いや、よかった、よかった。やっぱり、ここにいた」

今風の若い男性が黒い傘をさし、もう片方には、おばあさんを心配して、もってこられた。かわいい色の傘が握られていた。

「おやや。

あんた、この雨んなか、あるいてきたのかい？ いえでいりゃあよかったんに」

すぐやむで。この雨・・・」

とか、なんとか。

でも、確実におばあさんは助っ人にきてもらえてうれしそうである。

「じゃ、すいません

せがれが来たので、先へいそぐことにします 失礼します」

まだ、そんなに小ぶり、とまではいけないけれど、傘があれば十分に歩けるくらい。雨はちよつとずつ、おさまりかけてきていた。きの良さそうな若者もおばさんにつられて、軽く会釈をして、また、さっきみたいに足音を立てて、二人よりそいながら、いつてしまった。

みると、わたしの手に、なまあたたくくて、やわらかな、ガーゼのハンカチが置かれたままになっている。

「あ……。ちよ、ちよつと……」

名前もきかずに……。わたしったら、慌てていたなあ。

どこに住まうかも知らない。親切なおばさんからのハンカチ。まったく知らない相手だと思うのに、なぜかそのハンカチとは、むかしどこかで、出会っていたみたい。懐かしさがあふれてくる様だった。

「……。いっちゃいましたね。」

ハンカチ、おいて」

ふと。いままでの成り行きをみまもっていたのだろう。残った少年は口をひらいた。

無骨そうな横顔とは打って変わって、まだ、幼さのこる、高めの声だった。何か、自分だけ黙りこくっているのがたまらなかったのか。ピンとはってる糸がゆるんだみたい。どこか力の抜けていく、声だった。それに、わたしも、中学生相手、となるとどこか、自分の青

春時代を思い出され、一気に彼との距離がちぢまる気分でも、あった。

「そうね・・・」

これ、かえさなきや、って思うんだけど・・・どうしようかしらね」

少年のきもちをもっとほぐすつもりで、おどけた口調でいう。わたしに同調して、彼の口から意外なことばがこぼれた。

「あゝあ。

俺・・・ふられちゃったみたい」

「え？」

な、なによ急に。と、思う、まったく予期せぬタイミングで。その、話を。するかなあ。しかもまったく見ず知らずの、相手にだよ。

でも、どこか妙に思いつめた風な、表情でいたな。と、そういえば、その次点で初めて思えてきた。

「やくそく、してたんです。

もし、Okなら。きょうこの時間に、ここで待ち合わす。

だめなら、来ない
って・・・そう。

確信はあったけど・・・
破れたなり」

わざととぼけた口調で、ごまかす彼がちよっとだけいとしく思えるのが、なんだか不思議。でも。若いときのエピソードって、一つ一つ。宝ものみたい。これからもどんどんそういうのが増えていくんだよね。きっと。若い時期だからこそ、ばつぐんの吸収力でもって、たくさんのことを学んでゆくんだろうね。

今のわたしじゃ、とても・・・そういった、何かに対するエネルギーをもててるとは、とうてい、おもえないもん。

「あの。それ、さっきの、おばあさんの
たぶん、裏のおばあちゃん家のだと、おもいます。よかったら、
返しておきます？」

「え？」

朴訥として遠慮がち、だけれど、こちらへの好感をあらわす様な、
親切的申し出をしてくれる少年は仏の様に凜としてみえた。

「ぼく、あの、おばあちゃんとむかし・・・だったけど。よく話
した記憶が、あるんです

いまはもう・・・
ぜんぜん。あいさつすらしないけど」

「そう・・・」

雨が降ったからこそ。このバス停の中。ふたたびつながる記憶の糸みたいなのが、目の前でくりひろがられていた。そのことを知って、何かますます、わたしの中に不思議にきらきらと光る、くもの巣がかけられていった様に、思う。

「それじゃあ．．．よろしく、お願いしていいかな」

「はい。」

必ず、渡しておきます」

「よかったあ。助かるわ。ありがとう」

「いえ」

そこで、はじめて照顔の。少年から、おだやかな笑みがこぼれたのを、みのがさなかった。あじさいの青さによく似た、白い頬を軽く上気して。たった今ひとつふたつ、つぼみが開花して見えた。

「ぼちぼち

いくかなあーうーうー

ふられたあふられたあ．．．」

ふふふ。やっぱ、そこかあ。

少年よもっともっと大志をいだけ。と言いたくなる。かわいくて幼

い恋愛模様が、わたしのところに糸をもう一つ、かけてくれた様に思う。

細い彼の腕はぶらぶらと、所在なく。ひじで、通学かばんを押さえ。そして右手には、おばあさんへと託されたハンカチを握り締めて。

彼の足音がぐんぐん遠ざかって、その姿がみえなくなったところに、やってきた三人の少女がいた。

さっきの彼と同じ種類の制服に小さな雫をいっぱいくっつけて、似た髪型の三人は、どどっとかけこんできた。

「うはぁーやっぱあ胃から出るう」

「やった！きもー」

「って、うーひさしぶりにはしるからあ」

三人とも似た様な声音で話、そっくりな雰囲気をもっているから、三姉妹、といわれても納得しちやいそう。

「ねエ美春う・・・」

甲斐くん、いなかったねエ？」

「やっぱり、かえっちゃったのかなあ？それともあれって、冗談？」

「なにが？」

「だからあ・・・美春、きになってたんじゃないのお？甲斐のことお」

なにやら恋愛相談か。かしましい。

わたしはかしこまって、すみっここにおいやられてる。

ふう・・・もう。少し。雨脚がいつてくれないとだなあ。なんて、空の加減をうかがっている。すると、三人のなかの一人が遠慮がち、声をかけてきた。

「あ・・・の・・・？」

背の高い男の子、ここにいませんでしたよね？」

一瞬。なんのことだろう、という感じに、すぐには質問をのみこめなかったのだ。しかし。背の高い。男の子。同じ制服・・・。そこまえ考えればピンときた。

「あ。あの、さっきかえっていった男の子かしら」

「え？」

き、きやあああ！

きやあ

きやあきやあ！美春う！やっぱあいつあんたのこと
ずっと待っていたんだよお！」

「すいませんさっきってどれくらいに、いきましたかね？」

また別の女の子が矢継ぎ早に質問をなげかけてくる。

「えと・・・ほんとに、さっき、だよ。むこうに歩いていったけど」

「ほんとですかっあ、ありがとうございます。

よし、美春。電話だ電話。いまならいるって、あいつ。家に。ひとり、かえりついてるよお

きつとおく」

「えエ？そんなあ

いいよ。別にっ。いつだって学校で、あえるし。それにあたし、あいつのことなんて別に」

しどろもどろ、二人の少女の気迫におされて答えてる少女は、その手に、小さな桃色の携帯電話をしっかりと、にぎりしめているのだった。

「メールしよ！まずは、メール！ね！ね！」

「そうだよお！メールで、いまから会いたい、ってうつんだよ？」

随分、アプローチさせたがる。この二人は彼女の恋愛を成就させてくたたまらない様子だった。わくわくした会話からあふれ出すエネルギーギッシュな空気につられたのか・・・

雨が・・・あがりかけている。

それどころか、まるでもうひとたび朝がやってきた、かの様。遠くの空がぎらぎらと照りついた目でこっちをにらみはじめていた。い、行こう。蒸し暑くなりそうだ。

クラスメイトの恋に夢中な、彼女らから逃げるみたいに。わたしは発った。

足取り軽く、靴のさきはまだ湿っていたけど、そんなことも今はきにならないくらい、うすずみの空がだんだんと墨染めを脱ぎ捨ててゆく、変化がうれしくて、わたしは何度も何度も確認した。

晴れがやって来る。晴れがやって来る！

そう、思ったらだんだん自然と、ここから先にかけだしたくなってくる。

みんな。いいな。てばなしで恋。しちやえる自分であれて。

だけどわたしもう一回。

そうか・・・主人がもう少し自分自身に目を向けて、男磨きにめざめてくれたなら（??）

せめてもう一回。

お互いに、惚れ直した、って。あの、ドラマによくある台詞。いつてみたい。きいてみたいね。

雨上がりの風

ふとした喧嘩。

それが長引くというのは、よくある事だ。夫婦で生活している家なら、茶番だろう。それに、よくいう。夫婦の喧嘩は犬も食わない。どういう意味？よく知らない。

きっかけはほんのちよつとした事。なのにね。ああ・・・

お互い究極の子供になれる。そんな時間が愛しくもあり、時々怖くなる。だって、いい加減いい大人なのだし、もう少し譲り合えば？・・・ ついつい甘え合う。両方が子供なのだから延々喧嘩なのだ。それが長引けば風邪の様、熱をもち、自分なかもりがちになる。伝える相手がいない。いえない。

こんなくだらない内容。誰にも。

気軽にしゃべれる相手がいたら・・・？

「・・・はあ」

茶碗を持つ手をふと止めた拍子、夫の口からこぼれ出たため息。それがいつしか勘に触ってた。空いた茶碗にきがつかない。

「ごちそうさま」

先にいそいそ、食器をさげる。

「おい

セルフでよそうのか」

はあー。。。。。でたよ。いちいちうるさいなあ。あたしは家政婦

じゃないっていうのよ。

「どうしたんだよ？最近。口きいてくれないじゃないか」

「なんでもなあい・・・更年期かしらね？早々に」

「はあ？」

少しは外へ出て、拘束されてみたら、どうだ」

「いまさら何よ、意地悪いわないでよ。結婚して何年経ってると思うのよ、あなた、自分が会社でいやなことある分、すべてこちらへ押し付けるんだわ」

きっかけは。

きっかけは。自治会やら、なんやら。親戚のこと・・・など。もう、いろいろ。だ。いろいろ、あるのだ。一人でいたときは気が軽かった。風船みたい。ふわふわと、好きな所へ行けてた。なのに今ときたら、いくつかのホッチキスで服をとめられちゃってる様だわ。

みると、少年のよう。頬ふくらました、見慣れた夫の顔がきょうは不愉快に。ぐじゃぐじゃにかきむしりたい衝動に駆られそう、であった。弱虫、いびきかき、水虫もち！そんな全ての念を込めて夫の茶碗に白米をよそってやった。

わかってる。

ほんとは・・・ほんとうは、そんなんじゃないもん。夫の中に男らしい、力強さ、衝動がそなわっていたならば、あたしはどんなにかもつとせずしづかしづける妻であっただろうか。夫にはそれがないばかりか、熱情がさめきった部分があるのだ。まだ三十代のわたしから見れば、もうちょっとどうにか、改良の余地があるんじゃないの？っていいたいところ、だが、食べさせてもらっている分、やはりこちらは分が悪く、おしりのすわりもいまいち悪い。

それなら、どこかパートでも探し、働きにでてみれば。そう、思ったことも何度あっただろう。しかし一度落ち着いてしまった穴のむじなどでも言おうか。なかなか、この、三食ご飯付。永久就職の他探せる道がもう、決してないように思う。

だってわたしは、地味だし。何の資格も持っていない。いまさら勉強なんて無理。

「食べたら、お茶碗冷やしておいてねっ」

いいおいてから、洗濯場に向かう。一種むん、としたこもった臭いのあるそこへ立つ。夫のパンツや自分の下着が絡み合う、脱衣かごから、洗う物を分ける作業にとりかかった。

小さなものから大きなものを徐々に衣類の山ができあがっていき、最後に夫のワイシャツ。少し襟の内側が擦れた、お世辞にも新品同様、とはいかない。いつものシャツ。

外身に悪気は、ないものね。とかなんとかいっちゃって、うつすらついた染みを見つけ、漂白剤を薄くつけておいた。その時、普段あまり脱いだ衣類に顔を近づけない、わたしの鼻先へ掠めた匂いが、一瞬でわたしを未知なる世界へトリップさせた。

なにかしら。この、お花のつぼみがいっぱいちりばめられた、まるでスパへ漬かった様な気持ちに誘いこむあたたかな魅惑の香り。いやだ。

夫のシャツから香ってる？

くんくん。

くんくん。くんくん。くんくん。

におってる。確かに。微か、なのに決して薄れることはない。それどころか、なんだか記憶に染み付く香りよ、この独特の色香が。女のわたしにでさえ異様な雰囲気なすりつけてくるわ。

あ。

まさか。まさかまさかあ！そんな・・・のって！ありえない！ありえないよお。結婚七年目にして、ついに夫から別の女の影？う・そ。で・しょう？

そりゃ、わたしだって、違う前の男が夢にでてきた、ってのは、あるわよお。でも。でもさ。それはある意味妄想の類だったでしょうよ。違うの？ねえ。なに？なんなの。この、香り。いや。いやああああああ！

「おいー

トイレ か？俺入るぞ」

一人洗濯機の前で身をかがめ、夫のワイシャツに顔を近づけている、そのわたしの心中まったく知らずに。のんきな夫の声が届く。

「あ、あ、ええ。い、いいわよ、あたし入ってないから」

「ふーっやっぱ食いすぎかなあ。。。朝から二膳てのは、ちょいキツかったかあ

はっはっはっは」

何がおかしいのだろう。自分のおなかが出てきたこと、まったく気にしちゃいないのだ。あれほど前から言っているだろうに。健康診断が毎年春に行われ、その結果、二次検査のお呼びがかかると、たちまちわたしの不安の虫が騒ぎ出す。だまっちゃいないのだ。

すぐにお説教が始まる。ビールを控えて、たばこもそろそろやめな
いと。ほら、もうすぐ値上げだなんだとか、って世間じゃいって
るんじゃない。これを機に、禁煙すれば？と・・・

いつている。

いつている・・・それが、夫には。肌に合わない、いうのでし
ょうか。

もしかして、そんなのんきに。いますぐ目と鼻の先にある、夫の顔
が別の人格で、会社へ行くと、全くの、わたしの知らない。別人に
なりすまし。実は若い娘といちゃいちゃと・・・

じゃ。

じゃ

じゃあああごぼごぼごぼり

「はあー」

やっぱ俺の便通は最高峰ー

あ。水の流れが遅すぎて、流れないやわりイわりイ・・・」

う。

もう。このシャツごと便器へほうりこみたい。そんな、わけのわからない衝動をおさえつつ、も．．．わたしは、妻の持つ第六感すべて総動員したつもりで、イチかバチか、探りを入れる。

「ねえ．．．

あなたあ．．．

さいきん、何かよいことがあったんじゃない？」

「んー？なんだよ急に。さっきまで機嫌が悪かったじゃないか。なおったのかもう」

「ううん、それよりイ」

それより、もっとそれ以上。のことをきこうとしているんだよ。今から！

「それよりも、あなたに、何かさいきん良い、出来事があったかどうかしらあーってえ、思うのお」

「いいこと？って、どういう？？？たとえば？」

「．．．こお．．．」

間髪いれず、ひとさし指で夫の胸板を撫で回す。すると、

「ひよっ。う、くすぐった！や、め、て、くれ！そこ、弱いっ。うう、はあ！

なあんだ．．．そういうことなら、まだ少し出勤まで時間があるし、早く言えよお」

相好をくずす、っていうまさにそういう目じりの落ちた表情でわた

しを抱き締めそうに両手がば、っと広げたまんま、何かにわとりをかごへでも追い込む様な怖いにじりより。

「うわっ、いやだ、来るなっしっしあっち行け、シッ」

「なあんだあ・・・」

ひさびさ、お前の方から誘ってきたと思ったんだが・・・違うか」

う。うー。敵は強すぎる。でもあらゆる手を使っても必ずや探りとって見せる。ぐ。よし。

「いいわ。あなた。もう、いつでも、よし」

「あ？なんだよそれー急に機嫌が直った。と思ったらまた機嫌が急降下かあ？相変わらず読めないなあ」

なんだかしゅびゅん、と、しおれちゃったみたい。新しいワイシャツに着替えた背中から哀愁が漂い、なぜか毎朝、決まった場所だけはねる寝癖。そんな後姿に、恋心つかまれちゃう女子社員がいてもおかしく、ないのか。なあ・・・？

「ねえリーダーあ。その、背中に、抱きつきたくなるんですう
あたし、ちょいデブ専ですしィ。。」

リーダーの体系ってめっちゃあたし好みなんですよねえ」

とか、なんとか。いわれちゃったりしちゃってかあ？この。このこのこの。リーダー、やっと春がめぐったね？
めぐったね？

え？何をいつてるの、わたし。自分の夫だよお。自分の夫が他の娘から大絶賛うけてて、それ、のんきに受け止めていていいのかどうか。ああうん、でも。ねえ。

わたしと付き合う前まで、ほんとにこの人は色々な仕打ちにあっていたらしく。お見合い不審。なんて時期に陥った事もあったらしいのだから。ああだめね。どこかあたしも情にほだされてしまうたちで・・

「おい

本気でイクまえ、一発。どうだ？ファイトーーーーーいっぽー
ーーーーおん！！」

我に返ると、目のまんまえに、ワイシャツの胸ポケットが迫ってきた。

い、いつのまに間合いをつめていたんだろう？それとも、わたしそんな妄想ちゃってた？

「なんか色気のある、顔つきしてたぞ

お前。ほしいんだろ、俺が」

「はっ？何を、言っているの？そんなおなかでぶっちりのおっさんが！もう

四十だよ？いいかげん。わたしの忠告に耳をかたむけてっ

「ダイエットしてよ！」

「おまえはいいのか? ん」

ぶ
り
ゆ
り
い
ん。

何か、わたしの大切な分身に鉄槌がきたかの……ひどくさげすまれた惨めな気分お見舞いされたんですけどお？ 夫よ君の右手は今なにやった？？？

「つあゝゝゝ！ いったあ！ 背中のお肉つかまないと、っていつてるでしょ前からあ！」

「お前こそ。この辺どうなんだ？ ううん？ うん？ うん？」

「いや、いやっいやっつかまないでえ」

「うん？ うんうん？」

ひーーーーー！四十夫からの攻め。それは、限りなくセクハラに近い刑罰にも似ている。

「は
よ」

「支度しなさい」

「あそうだ」

明日、もしかしたらいつもより帰り遅くなるかも

そしたら先、飯くってていいから」

え？女子社員？と？なにか？

「んじやな。きょうもがんばってくんどー！！！！」

ぷいぷい。っと、体系にそぐわぬ小さな手のひら。が、ぴらぴら遠ざかってゆく。あは。新種の蝶々みたい。

っじゃ、ないっつっつイよー。。。。！！！！

こんなこと、しちやいられない。だめよ。対策をたてなくちゃ。万が一。女の勘がものをいったとして？逆にどうするっていうの。探りを入れて。その先は。ねえ。その、先・・・

あ。まずは、わたしも、誰かに慰めてもらわなくちゃ、そこからが始まりね。

て、え？携帯に手が伸びたあ？それって、早とちり？時期、早尚。今がチャンス。って何をわたし。春が来たみたい。自分こそ、何を始めようとしちゃっているのよっ。もう。気が動転しているんだわ。もう。もう。もうもう。

んはあー。そうだ、コーヒー飲みに行こう。

わたしはお財布を掴んで、戦、にでも行くかの様、わしわしといったものを両足で握りとるみたいにして、歩いていった。

いつもの。コーヒー屋さん。いつもの、ブック&カフェは・・・だいたい。この時間いくと、主婦のしゃべり場。あるいは幼稚園に行かない小さなお子さんを連れだ奥さんがまったりブランチ、とか。まあどっちにしろ、わたしと似たり寄ったりなタイプが集う時間。

かろんこれん。

ここのドアベルは少しタイプがよそと違ってる。変わったベルの音が、一番さいしょにお客さんを出迎えてくれるのだ。それは、いつでも、わたしをここへ初めて入ったか、の様。

そう、夫のところへ嫁いできた頃。当初を思い出させてくれたり、その貴重な音色は、ちよつとどきどきのときめきをくれる、音色でも、あったり、する。

「いらっしやいませ

あゝ、いつも、ご利用くださりありがとうございます

あの、いつものお席あいてますよ　ごあんないしますよ」

なにを喋っても。逐一、ハミングが入ってしまう様。子羊ちゃん。とそうわたしはその小柄な店員さんを呼んでいた。きれいに切り揃えた前髪がお洒落で、毛先は軽くウェーブがかって遊んじゃうかんじ。うゝんゝゝ。自分の魅力をよくぞ捉えてて、とっても似合っている。すてきなかわいい店員さん。仕草も少女ぽくて、一つ一つ目でぬすんじやいそうな、自分が怖い。

案内された後、いつものお決まりで、わたしは靴を脱ぐ。脱いで、かかとを踏みながらくつろいでしまう。なにか、そうさせられてしまう、魔力が、ここには。特にこの席には、なんかあるんだ、と勝手に思い込んでいる。

窓は表から見ると緑銀の淵にいはらがからみつく、素敵な飾り窓。そのガラス、あちこちにつたが絡まりあう、中で飲んでいるお客の顔がわざとみえにくく、してあるのだそう。

・・・そう、わたしがここへ初めて来た頃。教えてくれた店員さんへへ。あの人は今はもう既にはいないけど。その後に入った店員さん。ちょっと雰囲気が変わっている。すごく人懐こい笑顔で、こつちを見るの。たまらない。かわいい男性店員さん。

あ。来た、。

（つて、わかるんだよね。その人がこつちへ向かってくる空気感が。なんでだろ。伝わるう）

ふふ

ふしぎ

うやうやしく一礼をし、顔を上げる。鼻の脇に散乱してるそばかす。外国の男の子みたい。ちよっとお肌の色素が薄めです。

「あ。どもども」

今では気軽に、二言三言話せちゃうんだし、こちらから愛想をふりまいてしまったり、する。むこうからすれば、なんか陰気臭いへらへら笑いのおばさんが今日もきたぞ、な感じなのかなあ。

だって、素敵すぎる、ここの雰囲気、一度たりとも。わたし、なじんだ日がない気する。

「いらっしやいませお待ちしました」

え？

「そろそろいらして いただける かなあー？なんて．．． ほんなこと

いってわいけないですね ボクみたいな新入りが．．． なまいきを と．．

シッ！だまっといってください。チーフにしかられる」

細く立てたひとさしゆびの繊細な薄さ。が、彼のとてもまじめな仕事ぶりを物語っているみたい。

「だいじょうぶ、黙っておく

そのかわり、いつものカフェ・ラテ多めにサービスしてね」

うわ。ださ。おばさん。

「 はい。愛情多めで、淹れてまいります。お待ち下さいね」

う。うま。すぎ。その交わし．．

くるん。てうさぎみたい、その場の空気をはねらかして、去り際、ちょこん、て先程この席に案内してくれた羊ちゃんの体を交わして った。

あ。なんか、良いかも。ここのお店のうさぎと羊。一緒にワルツを踊りそうだ。

ん？あ．．． 意外ともう。できているのかも？うさぎと羊のコーヒ

ーカップル？

るん。

て、ああ。だめだめ。日常から一種かけはなれたこの場所へ落ち着くと、頭の中にメルヘンが鳴り響き出すの。現実離れ、した、この場所だ。いっそ、頭をからっぽにして、腰おちつけといったほうが、よさそうだと・・・

カフェ・ラテ（彼珠玉のアートで飾られた、リーフ模様のなみなみあつあつ）すすっていると、後から二人づれが、手を繋いで。彼が先に、手を引かれるみたいにして、やや細めの彼女があまり音を立てずに座席についた。

何か思いつめた表情の彼女がうかがえて、わたしは嫌でもそっちの方に気をもってゆかれる。いや、だって斜め後ろの席なんだから。なんだって、こんな昼日中。彼と手を繋ぎ、一軒のメルヘンなカフェに。だ。思い出のカフェで・・・別れを告げよう。かな。おぼ勘からすると・・・不要だな。こんなのって。

「だってだってえ」

それは唐突に彼女の口をついて出てきた言葉だった。、だってだってえ、甘い蜜がたれさがる様。語尾をのぼしている。

「だって、も。なに、も。お前これで、何回目だ？俺以外の男と・・・」

あゝらあらあ。それは拙いですね。彼女の方から？手、だしちゃったのかなあ。

「だってだってでもでもお」

「もう、それは、ききあきた」

なんだか、いざ、っていうとき男の方がなんか冷静だな、って思うるときあるわよね。それが一番怖い最後通牒。だったり。とか

「お前、俺と付き合っていて、さんざんだもん」

「だ、だあああああ
おシュンヅイいつも
つてええええええさみしかったの

どっかつれてつくくしないでエえええええあたし
あいされてるのかあわかないかんぢでエええええええええええ

ええ」

ぱた。

と彼女がテーブルに伏した様子。．．．困るよねえ。目の前でそんな、されたら。話すことも話せない？

「ま、いいわ。それだけ、俺がきょうここに前よびだったの

もう、電話もすんな、メルアド変えとく

じや
な」

あらうー。ちよつとコーヒーに手もつけず帰っちゃった感じなのかぁ・・・くう。もったいなあい。ここのお、どれも、全てきっちり店員さんが愛情込めて淹れてくれているのにイもお。

ぴりついた空気に、若干背中をさぶくしていたら、女の子が即刻顔をあげ、携帯か何か、につけてたストラップ。ミラー型のそこに顔を映した。いつ、なんどきも女は女である。・・・か。

ふう。よいものをみさせてもらったよ。

少し背後から重苦しさが消えた。若干さめちゃったけど変わらず美味い。ぬるさのカフェに口つける。

がつがつがつがつ。木の板を駆ってでていく女性の足音。

「ジュンズイー」

そのあまつたるく重たげな間延びした声がどこまででもわたしの思考をおいかけてきそうだった。

「っはぁ」

少しした頃に、羊ちゃんが空のトレイ片手にあらわれて、飲み残されて（いや、手もつけられなかったんだろうか）おきざられたカフェのカップを丁寧にさげてゆくのがきこえた。羊ちゃんはおくまで羊ちゃん然、として小さな背中がいつも以上たくましくも見えた。けれど・・・無理もないよね。

ここはカフェだから。カップルたちのわかればなんて、なつてほしくないに決まってるもん。かなしい雰囲気おいてかれちゃう、ってあんまりだわ。はぁ

「あの・・・もうしわけございません」

落ち着かなかったでしょう

ほんとうに・・・」

「ん あ

いいえいいえいいの。こういう時もあるさ、って ね」

ほんとういうと、ほんの少しばかりさ。

あたしにだって、ああいう時代があったのかもな。忘れ去られていた記憶の片隅に居座りし魔物？の様なアルバム、めくり返しそうにも、なった。うん。でもね。そういうの、穿り返してたら、たちまち時間って消えてなくなりそうだ。だから怖い。

いいんだ、もう。過ぎ去ったこと、って全部きれいな思い出たち。さらばじゃあ。

「あの

ほんと失礼つづきで・・・もうしわけないけど

何か、ありました？」

「え？」

みると、謝ってくれたあのふんわか笑顔な男性店員が、まだ立ち続け、そ、つとこちらの方、うかがいみる様なまなざしで、いつもよりちょっとだけ真剣な表情。こころなしか頬がシャープ。ひきしまっ
って見えてた。

「いえ。なんか・・・変に

いや僕の 気の もちようですかね 何か ふふ

ほんっと僕。変ですね。変。変。って
よく、チーフから
も香りこちゃんか、

あ香りこちゃん、あの、小柄なやさしい雰囲気の、おんなのこなんです

とか。 ようく、笑われちゃってます、いえ、笑って、もらえます
ます」

しどろもどろ。なんだなあ。コーヒー以外のはなすことと、なると。そりゃあそうだ。店員さんなんだもん。あたりまえ。でも。でも、小さなこころづかいや気遣い等、とても大切な要素だと思うから。

あたしは小さく会釈しながら、

「うん

わかる。

ほんとうに、どうもありがとう」
そう、つけくわえてみる。

あつはあー。どこまでも堕ちてゆかれそうな夕日。夕暮れ。
夕焼け時。って思ったことはありませんか。ここがほんとうは上空
でさ、あっち。空の方がほんとうは地上だったの。って。説。未だ
であったことが、ありませえん。

わたしのあたまは真っ白けっけ。羊の毛布でねむるのさ。っさ。
あ。程よく開いた両足。その間から、逆さに覗いてみるひさびさ出
会える風景は、わたしが小さな頃、よく見ていた風景だった。それ
が今もそのまま。あたしの足、開いた場所から飛び込んで来るよ。

ふっふ．．．

と、ついで。あゝした天気になあゝあある？

つつかけたサンダル、つま先つかってぽーんと放る。するとね、わ
かるんだ明日は晴れか？大雨か？

うん。サンダルが転がっていったその、行方。追っていき、みた様
な靴。その持ち主の足、にたどりつく。
あれ？

「びんごー。びんごー。びんごー。お

あした、晴れだよん どっかいこう。あしたから連休だよ」

あ。あたしの夫だった。

「おかえり」

「ただいま」

「いま、その道でこれこうてきた みかんうり．．．トラックにたくさん積んできてた

たいへんだろうなあ あれ？売れるのかな？全部。もったいないから全部ジュースにして．．．」

白い無地のビニール袋からのぞく少し硬い果皮。みかんがごろごろ、5／＼6個ある感じ。

「ねえねえ．．．これ誰がむくの？あなたの田舎から送ってきたのだってよう

たべんきにー」

わたしが、わざと、夫の高知弁を丸出しでまねると、夫は、あたしの低い鼻をちょこん、てつついた。

「いいよ

俺が食う

ゼー~~~~んぶ、食う」

「腹、壊す。また、出る」

「うっせー！いいんじゃ、腹が出てなんぼじゃ」

「はあ？誰がめんどろみるとおもっているのっ！」

・・・ああ。出たよ。また、これだあ。こう、なんでわたしは何か
つていうと、母親の様。子をさとし様。しかることしか、できない
のかなあ。

夫が少し前歩く、その速度にゆっくり、ゆっくり、ついて歩いてい
たら。進んでいた影が立ち止まり。あいた方の手がぷらぷら、動い
た。おいでおいで、と、でもいう様に。

あたしは照れくさくなって、いざ、つてときすぐいつでも離せる様
に、軽く。

夫の手を上から握ってた。

「あゝるっこ

あゝるっこ

ふふふふんふふん」

鼻歌なんて。まぢ、のんきね。

夫の歌にあわす様。わたしたちの手は、前後に振り子時計みたい。大きく揺れた。影が。

まるで、巨人とちいさい子供。子供。なんだ。わたしって．．．

こうしてみていると、ようやく、分かる気が、する。

仕事で疲れて帰ってくる夫を、道で出迎えたのは生まれて初めてかもな。なんだかちょっと新鮮ね。

「あ

そうそう　ちょっと回り道、していったいいか」

「うん？」

なんだろう。

そういう夫の舵取りにまかせ、わたしはただただ手をとられるままに、ついてゆく。すると．．．目の前には現れた、どれもこれも大きくて重たい黒の影法師かぶった、遊具たち。

小さな公園。昼間の喧騒をものがたる様に、砂場や、そこここ。置き忘れ去られたおもちゃ。おかしのかすなんかも、砂粒に混じって見え隠れ。

ここは大きな遊び部屋。お日様色のキッズルーム。が、なんか想像できて、ひとりで、うふふ、と笑いがこみあげてきちゃう。

「こっちこっちこっち．．

おゝいいるかゝゝい？にゃんたゝにゃ。
にゃ。

にゃんっ？

そんなものが。いる。のか？

夫から離れた場所で立ち尽くして見てたら、ゆらん。かさん。低木の奥の方、揺れて、かきわけるみたい、何かがこちらへ進んで来てた。みてる間に、硬い枝葉の割れ目から、顔をのぞかした、小さな小さな天使たち。

一匹が顔を出すと、他方にも枝葉の割れ目ができ、すぐさまそこから似た顔の兄弟があらわれた。

「ほーい

ほいほいよちよちよち」

赤ちゃんをあやすみたい。指を子猫にふれさせて、においを嗅がすと、その手の行方は、夫の胸ポケットにあった。

「じゃん！

きょうはお昼にねエこれを買ったのです

でも我慢して食べないで君らのためにとっておいたのです」

プリンと真っ赤なシートで巻かれているウインナーソーセージが、その手には高々と光り輝いていた。

子猫たちは、どれほどこの時を、待ち続けていたんだろう。わたしには想像がつかない。

「うんー。。。前はもっと居たんだが。。」

やっぱ、なかなか野良ではいきてゆけないだろな」

夫のあげたソーセージにむしゃぶりつく子猫たちがなんだかとても
かわいそうになる、口ぶり。いや、まてまて。だめよだめだめ。
いち早くわたしは、夫の前だと鬼になれる術を身に着けてしまった
かの様で、

「だゝめ！

飼おう、なんてそんな甘いもんじゃないんです 知ってるでしょ
う？ 昔飼ってた犬。

「どんだけ世話したの」

「わかってるよ！だから

こうして、ときおり、こうして。。。 来てあげる。。。
だけ だら」

毛糸玉の様。すぐそばの兄弟と仲良くじゃれあう子猫は純真むくのなんにも知らない、命でしかない。なのね。どうして．．．もつといい場所へ。いかせてあげられないんだ。自然のもつ。運命、っていうものは。かなしいかな。こんなすぐそばまで、人の目に、人の力だけではどうにも果たせない、命の連鎖をみせつけてくる。

夫の背中ごし、見える子猫たちの小ささは、それだけでもう。たからのもの様。あったかく、ふわふわの、何にも知らない未来を象徴して、見えた。

希望も、何も見えなくて。ただ、あるのはうまれてきた事実。そしてほんのわずかな過去。なのかな。あのこたちにはまだほんの数滴にしか満たない、思い出の水がめ。そんなものが見えた気がして、今たっている己がたぶたと、音がしそうなほどたっぷり。過去に満たされた。水がめ。

それは、少しよじればいつでも零れて、どこかを濡らす。十分な水がめには、違いはないけど。

満たされていないのは．．．そこじゃない場所。いたい。わたしの中には見えない水がめがいくつ並ぶの？こんなにも、欲望の塊になっちゃ。醜くなくては、生きてゆかれないよね。

「っはあーー」

かわいかったな

はやく誰かに拾ってもらえればいいのに」

「またそういう気軽なこと　いうんだから！
大変、っていつてるでしょう」

もう。ほんとにイ。

公園を出て、また先来た道、ゆらゆら影と夫と並んで歩いていく。

ふと、気がついた。ならんで繋がった夫の袖口から、なんか糸くず
が垂れ下がっていた。不思議に思ったから、そっと手を握りつつ、
持ち上げて、じぶんの顔先にもってくると・・・

なあんだ。さっき、公園の低木から絡まってきた葉の類だわ。ん？
あれ。

この・・・不思議な。魅惑の香り。

一度しったら、あらがえない記憶がまきもどされる一種、危険な香りが。鼻腔から脳へかけあがり、一気に、かけおいた。

この。記憶っていうものは、瞬発的にのぼっておりる、ジェットコースターにも似た、素早さがあり、更に、もっとも追求したかったことと合致した場合は、脳が全総力でもって、記憶を開け放し、解決の一途をたどらせてくれる様にも、思う。

だって・・・

この・・・香り。

「ねえ？これ、何の花の香りかなあ」

目を閉じて深く、浅く、夫の袖口に鼻をくっつけて嗅ぎ取るわたしを少し妙な顔つきで、でも決して嫌がる風でもなく、

「たぶん・・・　じんちげか」

「じん　　ちげ？」

ぷつ。。。もおう！なによ、それ！そんな花って、あるう？」

「そう、じん　ちげ　じん、ちげ。だよ　調べてみあとで

花図鑑にのっているから

実家の庭にもあったかなあ？なかったつけ．．．」

夫の記憶はよく、実家に飛ぶんだよね。最近特に。年齢のせいでしょうか．．．こう、口に出していったら怒られる。

じん ちげ じん．．．．．ちげ。

早速、パソコンを立ち上げて、検索をしたわたしに、その花の名前はすぐにわかった。ただしし名称を「じんちようげ」と、いうんだ。

ああ．．．そういえば、こんな花。公園やなんか、よく、みかけるわね。白い小さならっぱい形の花がわんさかなるんだわ。ふんふん。

なんととはなしに、調べた花の名前。であつたが、さりげなく読んだ説明文。その、あとの方にきになる花言葉が見てとれた。

「沈丁花」その花言葉は．．．「永遠」だってさ。

永遠。

なんとなく、わかるかもしれない。この、お花から香る臭気。手繰り寄せられる忘れていたり、いまじゃもう、思い出せないちいさかったときの、憧れや、夢のかずかず・・・

そんなものにも続いていかれる。ちょっと変わった、独特の、花のにおい。

「おい！

ところで昨日だかおととい出したワイシャツの替え、はやく洗ってアイロンかけておいてくれ
あれ、きにいつてんだからな」

・・・は。

「はい、はい！わかりましたっ」

ふと、今朝の自分。その記憶を手繰り寄せる。洗濯機に寄りかかったまんま、なんにも手をつけずに置いてある、洗濯物の山・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7034m/>

虚像の鏡

2011年10月7日14時38分発行